

第五六八回 七月六日（金）

地域のボスを告訴するには

——告訴状作成ガイドを読む——

東洋文庫研究員 大澤 正昭  
上智大学名誉教授

はじめに

本講演の課題は、明代日用類書に掲載された告訴状作成ガイドを題材にして、典型的な告訴状の内容を紹介すること、およびその告訴状が提出された社会的背景を考えることである。具体的には、余象斗（号は三台館山人）編、万曆二七（一五九九）年刊『新刻天下四民便覧三台万用正宗』（通称『三台万用』）所収『鳴情均化録』の「土豪」の項目を検討する。

## 1 明代日用類書と法制史関連記事

「類書」は中国古来の図書のジャンルで、本来は皇帝・官僚をはじめとする知識人の治政や教養などに役立てるために編纂された。しかし出版活動が活発になった明代末期には、ある程度知識を持った一般人を対象とした「類書」が大量に発行され、その通称が「明代日用類書」である。内

容は日常生活に役立つ知識の集成で、法律知識はもとより、占い、手紙の書き方、算術、商売など多分野にわたっていた。ただしその内容が低俗であるとみなされ、多くは散逸した。他方、日本に舶来されたものは珍重されていた。

日用類書の法制史関係の項目に注目すると、およそ三分野の基礎的知識がまとめられていた。すなわち、①簡便な法律の知識、②契約書などの書式、③告訴状の書き方、である。いずれも日常生活で必要な法的知識であったのだから、そこに③が含まれていることはきわめて中国的であった——ことを表している。

## 2 「告訴状作成ガイド」の紹介

### （1）総論の一部

ここでは告訴状の構成について指南されている。要点は以下の通りである。

①作文法について。論旨がわかりにくい、あえて整理すると、次のような構成が推奨されていた。「硃語」（冒頭の標題）——犯罪事実（前段・後段）——判断の根拠と結語（繳段・結段）となる。つまり、大きく見れば三部構成、詳細にいえば五部構成がよいと指南していた。

②五部のうち、前段は告訴事案の内容を明瞭に、具体的に述べることで、後段は論理的に説明することが大事であるとされた。

③総論の末尾部分で「言葉を飾って」「胡麻化しても」よいとされているが、この一文の意図は不明である。

④総論の最後に、文章構成の注意点について韻を踏んだ歌にまとめている。読者への配慮である。

#### (2) 告訴状の「土豪」前段

ここで告訴の対象、つまり被告には土豪・大戸・富豪が想定されている。彼らは地域社会の有力者、すなわち顔役・ボスであり、地主・高利貸業の他、塩や酒の密売も含む流通業・徴税請負・暴力団などを兼ねている。その特徴は以下のようにまとめられる。

- ①彼らは大きな財力を持っている。
- ②家族を中心とする集団を中核とし、息子が生員・胥吏になっている者もいる。その周囲には大勢の手下を集めている。
- ③国家機構の末端にいる地方官僚・胥吏・衙役あるいは退職官僚を含む郷紳などと結びついている。
- ④あらゆる「悪事」をはたらき、横暴なふるまいをしている。

また、前段では訴訟事案の大略を簡潔、具体的にまとめ

た例文を列挙している。

#### (3) 後段

土豪の項には三条の例文しか載せられていないが、闘毆など別の項目にも土豪による「悪事」の例文が見られた。これは項目分類の問題であり、被告の属性による区分と事案の内容による区分の二つの基準が併存していた。

また、後段の記述は論理的で、筋道が立っていることが求められた。例文として、手下を使って強引に資産を奪う、胥吏を買収する、盗賊をかくまうなど、事案の実態が述べられていた。

#### (4) 繳段

ここでは当該告訴事案の裁かれるべき根拠を指摘する。それをまとめれば「天理・国法・人情」となる。しかし、現代の「情状酌量」にあたるであろう「人情」の解釈は難しい。つまり「人情」とは、①裁判官自身の人情、②当時の現地の世論、③一般的な人の情、などと考えられるが、その判断がつきにくい。

また『大明律』の用語が引用されており、一連の例文が法律知識を持った者の著作であることも確かめられる。

#### (5) 結段

これは告訴状の末尾に置かれるべき必須の文言である。裁判を担当する地方官ひいては皇帝に、心情的にお願いす

る形式をとっていた。

まとめ

以上、明代の告訴状作成ガイドを「土豪」の項目によってみてきた。そこでは「土豪」に対する訴訟の内容が簡潔に述べられていた。それは同時に社会の矛盾の在りかを示すものでもあった。ただし、土豪の活動についてはパターン化されており、彼らの悪事、悪党ぶりが誇張されている点には注意しなければならない。原告側は裁判に勝つために誇張してアピールしている可能性もある。

付け加えると、この「土豪」など有力者・ボスには二面性がある。告訴状の典型例に従えば、もろもろの「悪事」が強調され、一定の地域を暴力的に支配しているイメージが浮かび上がる。しかし一方で彼らは、地域社会の安定に寄与する存在でもあった。具体的には、飢饉の際の援助、戦争の際の地域防衛などの役割も果たしていたと考えられる。